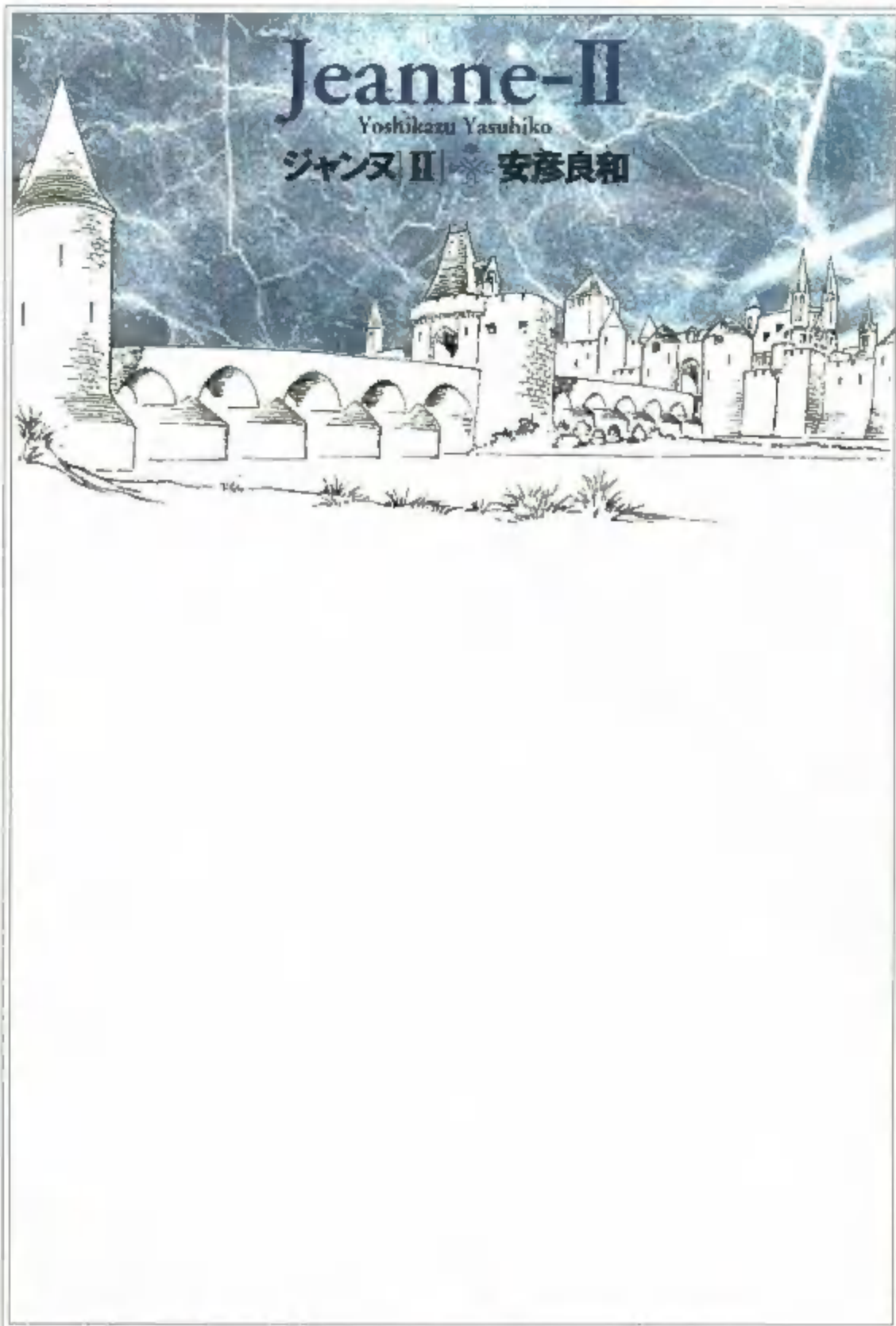
Jeanne-II | Yoshikazu Yasu ko

原著 | 大谷暢順

Très chers t bien-aimés, Jeanne l
Pucelle, qui ésirerait bie voir, a
reçu votre tre dans laquelle vous
lui disiez qu vous craigniez d'être
assiégés. Vou ne le serez pas, si je
puis rencont r les ennemis d'ici
quelque tem s. Si je ne les
rencontre pas, s ne viendront pas
vous assiéger, t vous fermez vos

portes. Car je pourrai venir rapidement
vers vous; et si les ennemis s'y trouvaient,
je les ferais chausser leurs éperons avec tant de
hâte qu'ils ne sauraient pas où les prendre, et,
dans le cas où ils auraient mis le siège devant
la ville, je le leur ferais lever rapidement. Je
ne vous écris pas autre chose pour le moment;
soyez toujours bons et fidèles. Je prie Dieu qu'il
vous ait en sa garde. Écrit à Sully, le 16 mars.

ジャンヌ|II|目次

前巻までのあらすじ

エミールはロレーヌ老公の愛妾の娘だった。本名はエミリーである。彼女が男名を得、男子として生きるようになったきっかけは、老公の死であった。母を惨殺した正妃マルグリットの追及を恐れて、彼女を養子としてひきとったヴォークールールの代官ボードリクールがそう工作したのである。

「彼」エミールは、〝奇蹟の少女〟ジャンヌ・ダルクと運命の糸で結ばれていた。幼いころ、彼はロレーヌの城でジャンヌに会っていたし、ジャンヌを王太子シャルルの下へ送り出した当人は、養父ボードリクールだったからだ。ジャンヌは既にルーアンで火焙りになっていた。しかし、かつてジャンヌが旅立った城門で幼いエミールは幻影を見る。

「フランスへ」向かうジャンヌの姿だった。

＊　＊　＊

自身の運命を予感しつつエミールは成長する。「その時」は、そして訪れた。野望に満ちた王太子ルイが、父王シャルルに対し叛旗を翻したのだ。養父ボードリクールの名代としてエミールは出征する。あたかもジャンヌの足跡をなぞるように、西へ、王の下へと。

最初に訪れたジャンヌの村ドンレミイで、エミールは再びジャンヌの幻に会う。素朴な村娘だった当時のままのジャンヌは、エミールに言う。

「国王様を護って。わたしがしたように、どんなことがあっても」

＊　＊　＊

英仏百年戦争は終局を迎えつつあった。ジャンヌの奇蹟的働きによってフランスは最大の危機を乗り越え、新王シャルル七世の下、失地は徐々に回復されつつあった。しかし、「弱気な王」シャルルへの世の信望は薄く、かつてジャンヌとともに彼をランスの戴冠式へと導いた武将達は、ことごとく王太子ルイに味方していた。王国は新たなる分裂の危機に遭遇していたのである。そんな中、敵中を進むエミール一行は無論多難だった。従者の一人、かつてジャンヌの旅にも従ったベルトランはよくエミールを援ける。が、途中に家来として従えた、街道荒らしのガルソンの裏切りの為に、オルレアンの宿でエミールは反乱派に捕えられてしまう。

ジャンヌ・ダルク

エミール

王太子ルイ

＊　＊　＊

折しもオルレアンには反乱派の諸侯が参集していた。一同の前に引き出されるエミール。彼はしかし名だたる面々に向かって説く。

「なぜ王陛下に敵対するのですか。イギリスに勝ち平和を取り戻さなくてはならないのに！」

若き王太子ルイがそこに現れる。彼はエミールの訴えを一笑に付す。

「正義も神の援けも要らない。強い者が勝つのだ」

王太子の粗暴な現実主義にエミールは気圧される。なによりも、神の声に従い王国の大義の為に戦ったジャンヌの、その後の哀れな運命が王太子の考えを裏付けているように思われるからだ。高塔の小部屋で、鎖につながれたエミールは弱気にうち沈む。

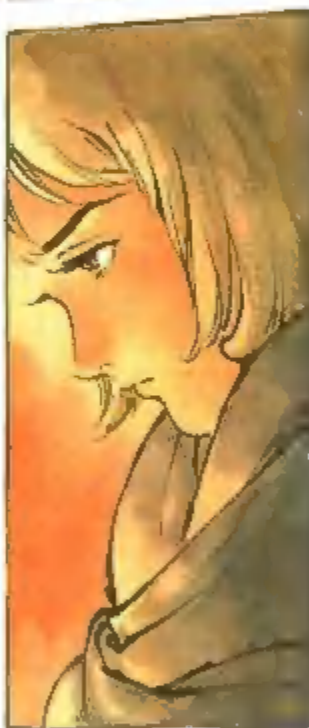
＊　＊　＊

その時ジャンヌの声が聞こえる。エミールを励ますジャンヌ。しかし、初めてエミールは彼女に抗弁する。

「なにもわからなくなってしまった。自分で考えたい。好きにさせて」

ジャンヌの叱声がとぶ。

「人の力がなに?! 自由がなに?! あなた以上のものにあなたは従いなさい!!」

次の瞬間、鎖が切れ、小窓の鉄格子もはじけとぶ。ジャンヌの声に強くうながされ、エミールはその小窓から身を躍らせる。はるかに下を流れるロワール河の暗い水面にむかって……。

ギ

ギィ

ギ

ベルトラン

ほかのみんなは?

黙っていらっしゃい
干草は口をきかんものです

…………

あたたかくしてさしあげますよ

なにかひどいことをされませんでしたか？
やつらに

まあ
無事だったのが
なによりですわ
おどろき
ましたよ
塔に登って
お助けしようと
近づいたら
いきなり
上から降って
来なさるん
だから

それにしても
不思議な
ことです
あんな所から
とび降りて
たいしたおケガも
なかったなんて

いけないことだけど、神様
わたしの信仰の心はまだ
そのくらいのか弱いものなんです……

おい小僧!
これは
おまえの舟か?
若い男の土左衛門を見なかったか?!
あ?!
へ。
へえ。
死体だ死体!!
死体が流れておらんかったかときいとるんだ!
ちっ!!
エミール様!
は!
は!
は!
は!

ベルトランさまあ〜〜

兵隊が追いかけてきて
舟がみつかって
そして

内をしらべて
死体がなかったとか?
そうか
やはり来たか

それはそうと なんだ ピエール
そのアカい顔は?
ははあ……

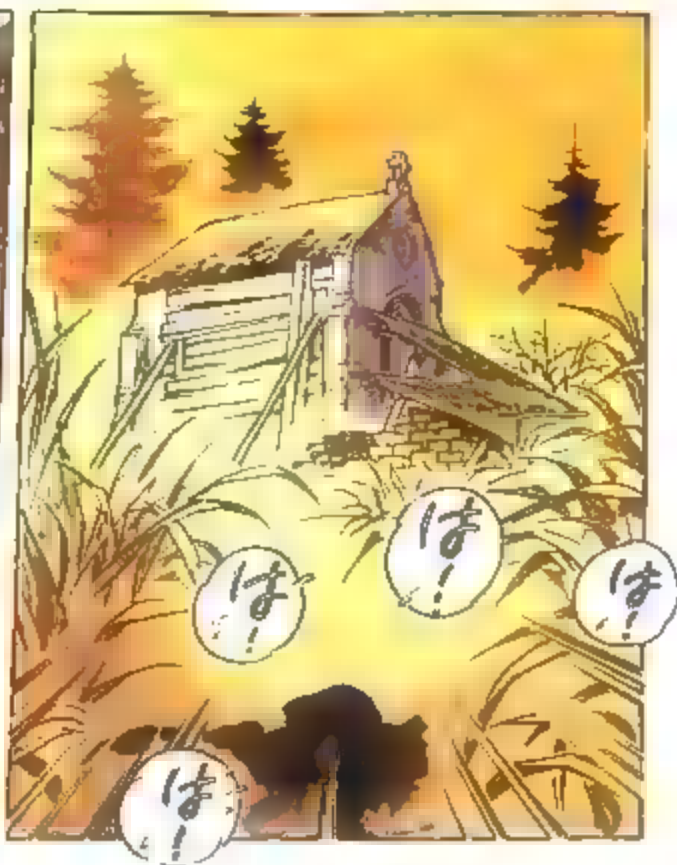
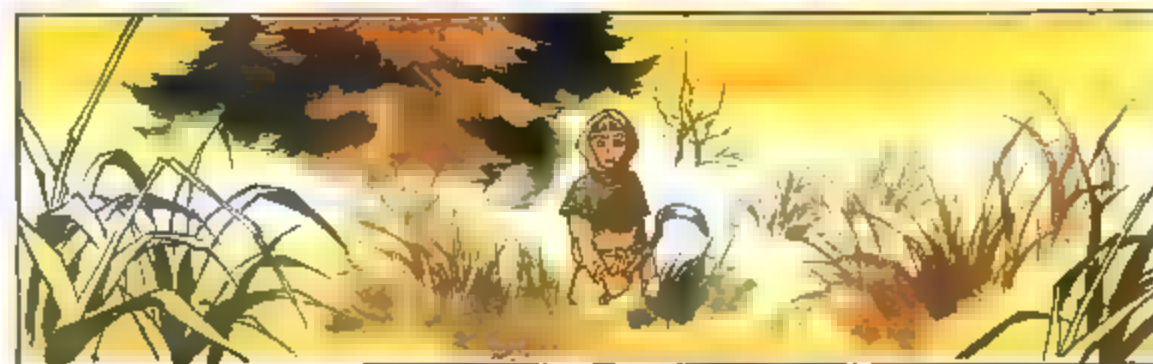
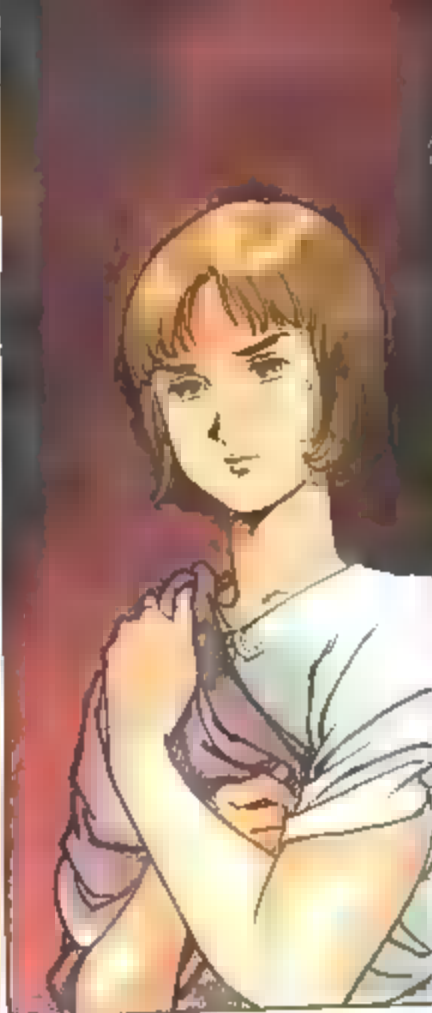
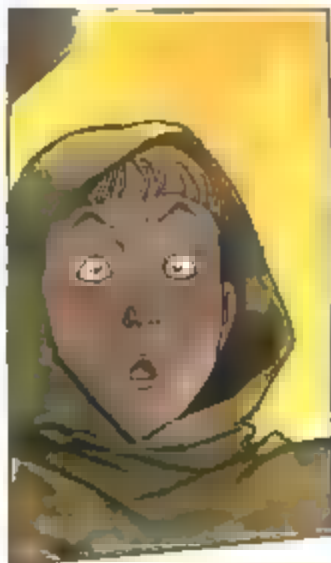
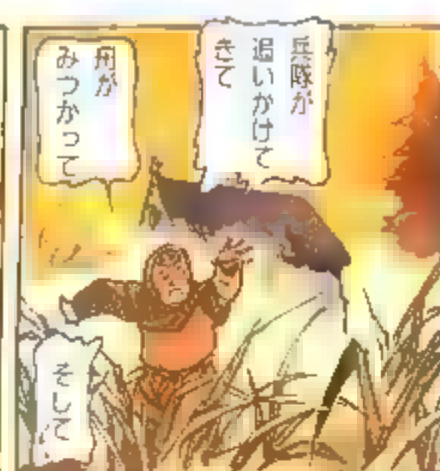
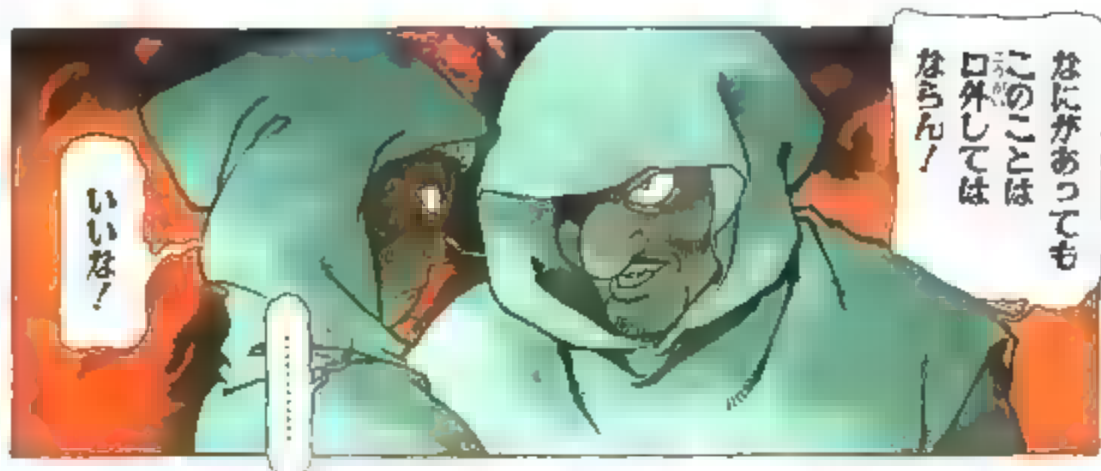
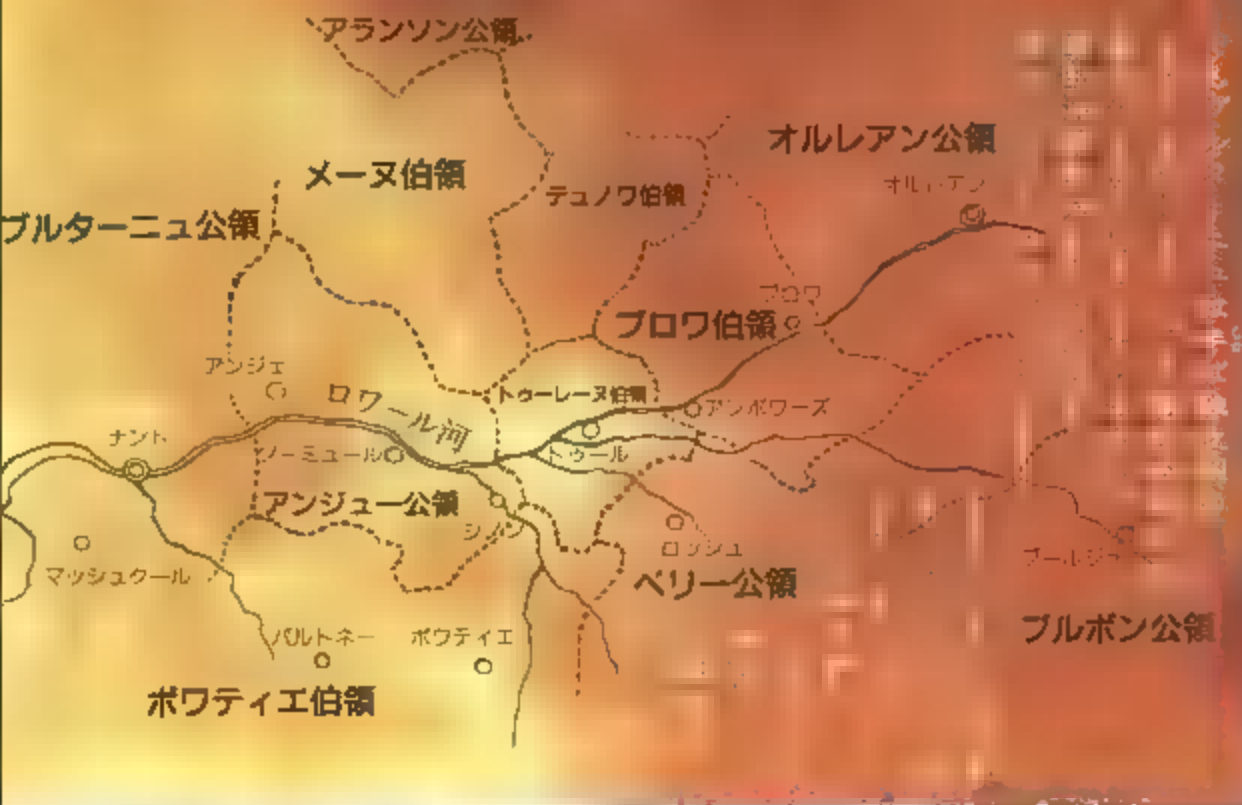
そういえば おまえはまだ知らんのだったな
じ じゃ
エミール様は ほ、ホントは…

そうだ! 女であらせられる!
訳あって男子として育てられた!

だがな!

なにがあってもこのことは口外してはならん!
いいな!
……

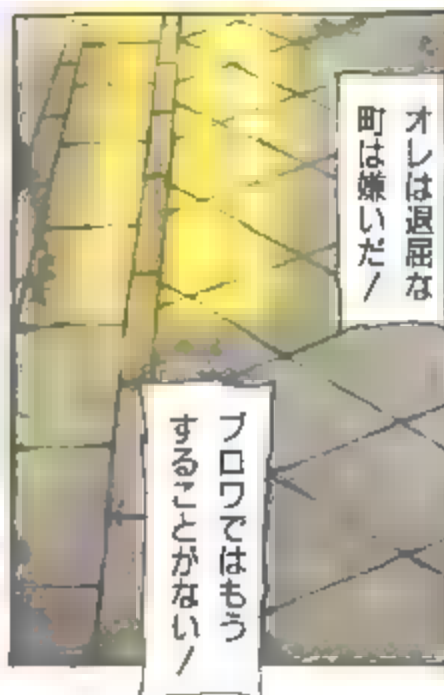
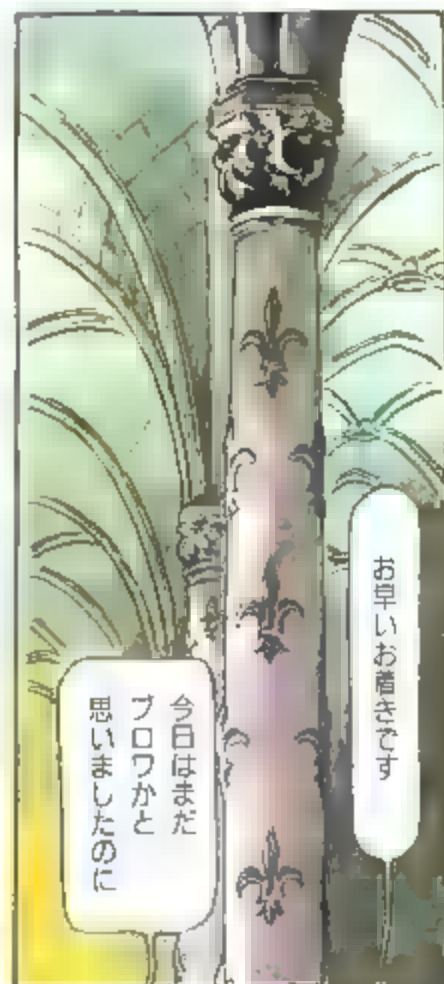
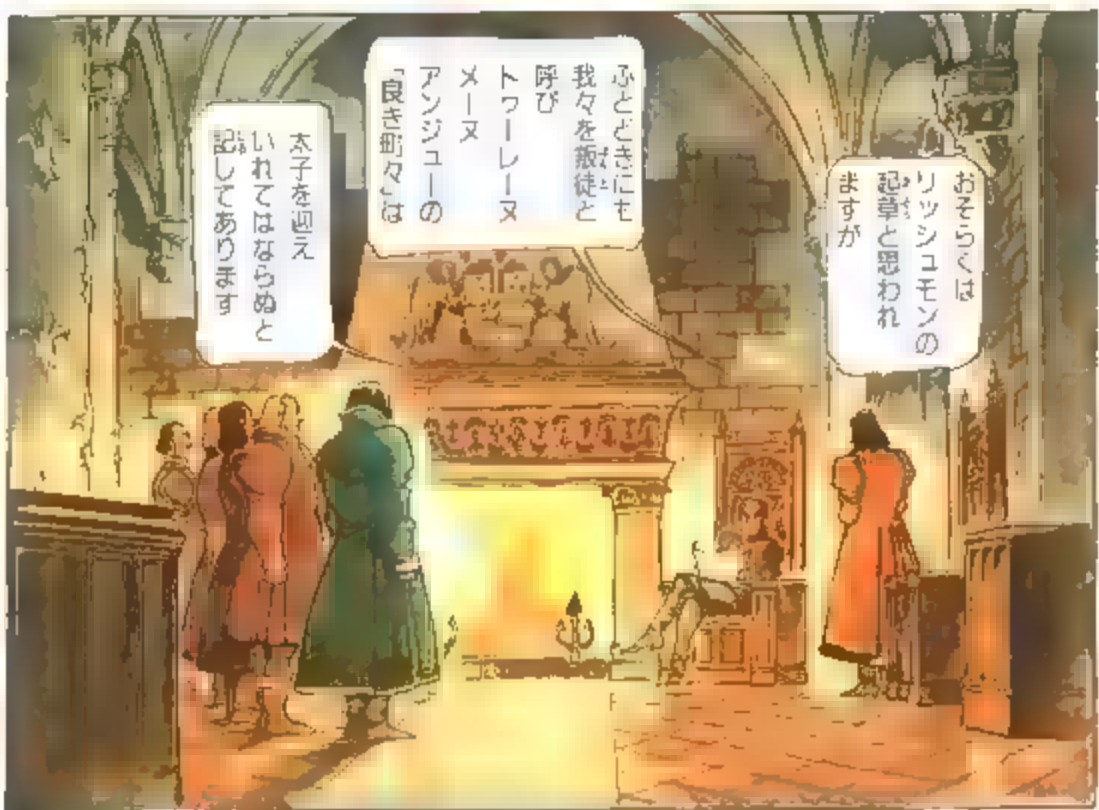
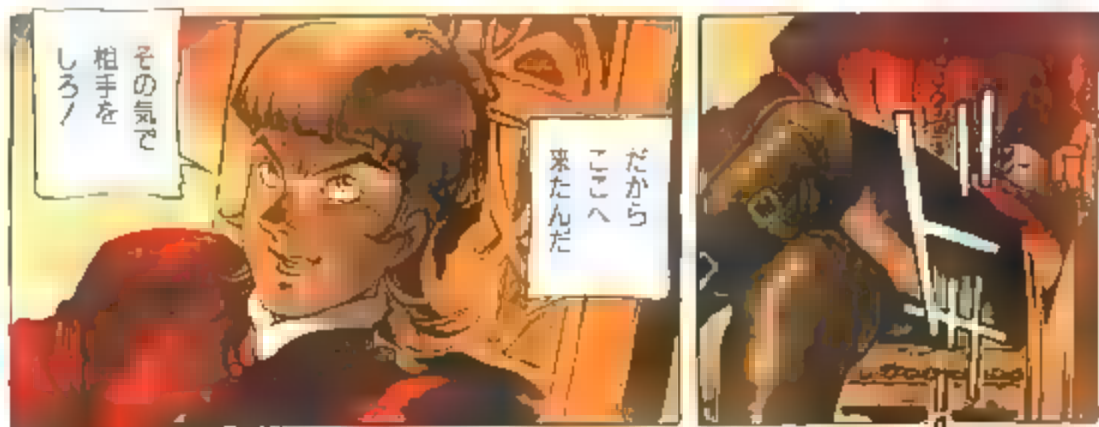
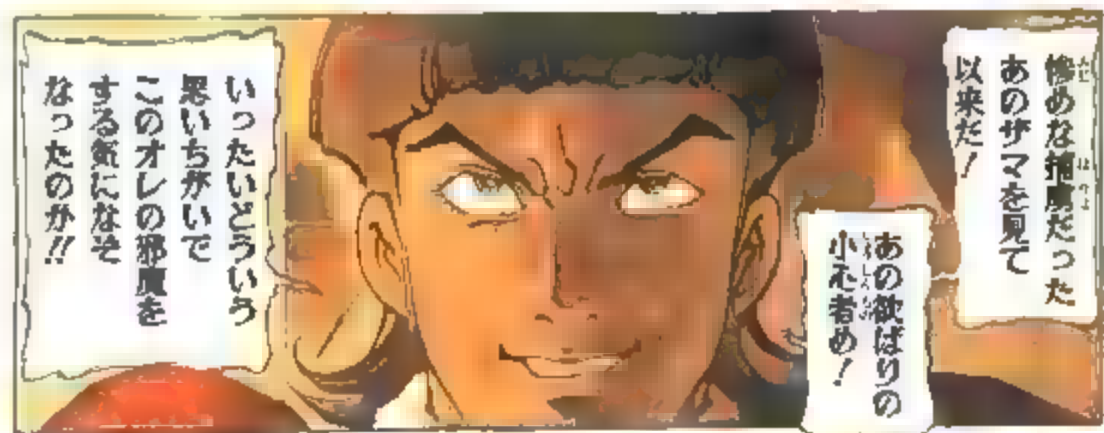
一度網を逃れた魚は二度と捕まらんそうです
うまい具合です

トゥールまで行けばこっちのものですよ
トゥーレーヌ公は王陛下の御味方ですからな

心配は要りません

このロワールをくだっていけばやがては

両岸が全部我々の側になるんです

この時王陛下にとって最も大きな支えになっていたのはブルターニュ公国でした。

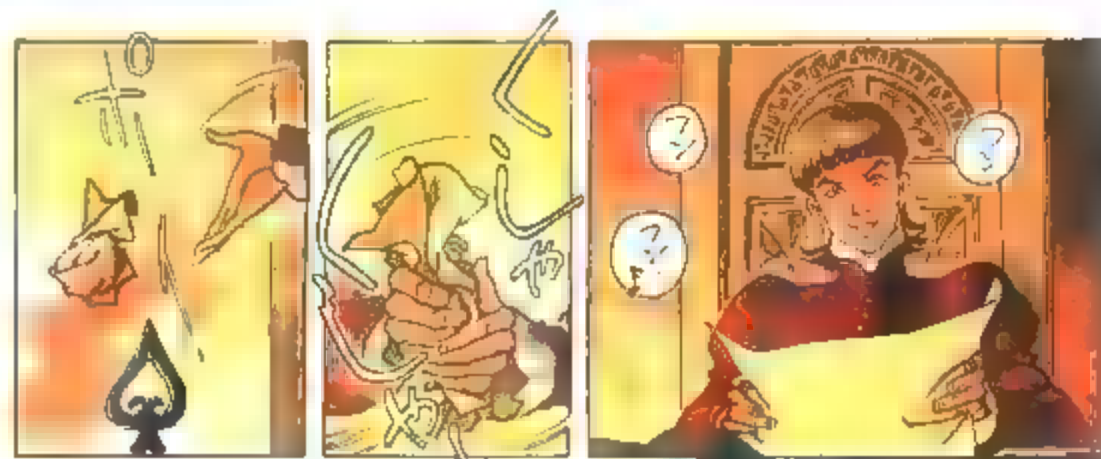
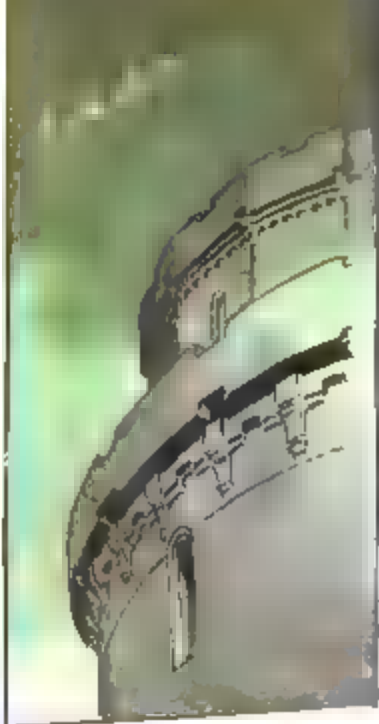
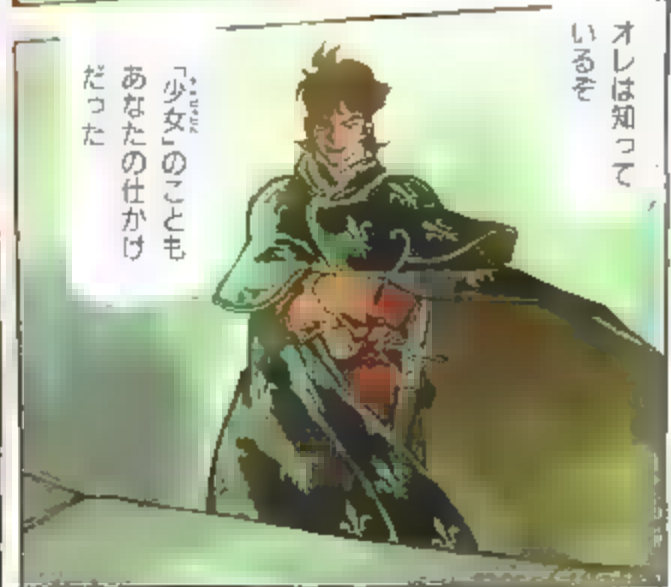
リッシュモン大元帥はブルターニュ王ジャン五世の弟だったからです。

お早いお着きです
今日はまだブロワかと思いましたのに

オレは退屈な町は嫌いだ！
ブロワではもうすることがない！

だからここへ来たんだ
その気で相手をしろ！

これがその…
王陛下が先に発せられました勅令の写しでございます

おそらくはリッシュモンの起草と思われますが
ふとどきにも我々を叛徒と呼びトゥーレーヌメーヌアンジューの「良き町々」は
太子を迎えいれてはならぬと記してあります

●ルネ・ダンジュー——ルイの母・シャルル7世妃マリー・ダンジューの実兄。前はロレーヌ公爵の継承権を巡ってブルゴーニュ公と争い、敗れて人質になっていた。その解放はリッシュモン殿の尽力による。

戦って勝つことが
父から王位を継ぐ
条件だというのなら
いつでも受けて立つ!
そして
勝つまでだ!
フランスの王冠を
もうこれ以上
病人や臆病者の
頭上にのせておく
ことは出来ぬ!

＊病人や…――シャルル七世の父シャルル六世は、精神病の発作にしばしば見舞われた。

しかもそれは成功した！
「少女」の働きはあなたの期待した以上の申し分のないものだった！
もしも少女・ジャンヌが奇蹟を呼び起こす■女だったとしたなら
あなたはそれを操った大サタンだったわけだ！
気にいらんな！
ならば今度のあの女はなんだ?!
同じ手口で二匹目の獲物を狙ったとしたら利口なあなたらしくもない
が それよりも
なあ 叔父貴よ
あなたはそのいかさま錬金術師のような手■で
今度は誰に勝とうとしているんだ?
一度目はブルギニョンとイギリス人が相手
そして二度目は
このオレか?!
ふざけるなルネ・ダンジュー!!
この甥を甘く見るなよ!!

トゥール

王太子が来る――!

王太子はもうアンボワーズに入った!

兵隊を集めている!

戦争だ!
戦争だ!!

町から逃げる者 逆に町に 逃げ込む者…
金目当てに 集まる傭兵達
いつになっても 変わらぬ 戦の前の ながめですな
トゥールはすぐに 抜かれるでしょう
トゥーレーヌ公じゃ とても王太子の相手は つとめきれません
やはり たのみは ルネ・ダンジュー様と リッシュモン元帥だ

まだ
歩けますね？
トゥールでせめて 一休みと思って いましたが
こういう 成行きじゃ
やはり早いとこ ソーミュールまで辿り着かないと……

どうしました?!

エミール//

待ちなさい//
どこへ行くんです//

そっちは
だ//
たった今町へは入らないと言ったばかりでしょうかっ//
エミール様//

ダメだ!
戻りなさい//

ええい!
なんて世話のやける//

エミール様ぁ//

あああわ！

なんだ?!
なにやってやかるんだよ！
ケンカだ！
サムライと商人の馬車が
ハチ合わせして道をあけるのあけねえのって
しょうがねえなあ！
どっちでもいいからなんとかしろオ！
後がつかえているんだ!!

あの人を
追いかけて!!
早く!!

エミール様ぁ!!

はっ
は
はあ
はぁ

はっ
はっ

はっ
はぁ

ざん
ざざざっ
ざん

ざん
はあ
ざん

お　おまえは
どこの者か？

わしの…首を
とろうというのだな？

ならばくれてやる！
て…
手柄にするがよい！

あなたはもしや…

第2章

CHATEAU DE GILLES

ジルの館

見つからん⁉
馬鹿‼ 見つからんではすまぬ！
捜せ‼
かならず城内に居られる‼

王陛下は小心であらせられる！
だからとり乱すとなにをされるかわからん！
いつものことではないかっ!!
特にっ！

「橋」—には心的外傷があるから
重ねがさね するようにと言ったではないかあ～～っ!!

王陛下にもしものことがあったらわしはアンジュー公とリッシュモン元帥に
あわせる顔がないわあぁっ!!

伯爵
余はここだ

……

陛下――っ!!
まあご無事で! いったいどちらへ?!

皆に心配をかけてすまぬ
たしかに
余はあまり気丈なほうとは言えぬが
さっきはわれながら失態であった…

もう騒ぐでない
ルイの手の者が忍んでいて聞きつけるやもしれぬ

もう一度馬車を仕立ていッ!
余はアンジェへ行く!!

こ 今度は
大勢伴の者を…
要らぬ!
兵は貴重ぞ!
よく力づけて叛徒どもにそなえよ!

エミール

汝は余の傍を離れるな!
いつ何時もだ!
いいな!
はい

皆も見知りおけ!
良い小姓だ
エミール・ド・ボードリクール!
今日より余の傍付きとする!

なんと長い橋だ
陛下！
もうじき渡り終えます！
もっと追え!!
駆け抜けい!!

アンジェ城

オオオ
さようです
ふむ……

あれがそちの言っていた
『国軍』か?

見たところ騎兵が…
おらんようだが?

いないのではありません
要らないのです

勇ましさのみを誇って独り駆けするような
旧い騎士の戦法を捨てない限り我が軍はいつになってもイギリスに勝てません
ふう~ん
そういうものかのぉ

これからの武器は槍です それに
砲
鉄砲
そしてなによりもよく訓練された兵士の働きが戦の勝ち負けを決めるのです!

金目当てでどっちに転ぶかわからぬような傭兵どもや街道荒らしまがいの諸侯の顔色をこれ以上王たる者がうかがっていてはいけません!
ふむ
それは余もわかっておるが……

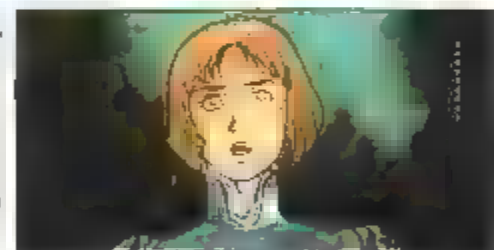
ルイはアンボワーズに兵を集めて先だってもここへ使いをよこしたというが…
あれがもし攻めて来ても防ぎきれるかのォ…
そのことでしたら…

あの者は?
ん?
ああ あれは
ボードリクールの息子と言うておる
なかなかよく気のつく者なので
傍付きにいたしました
……

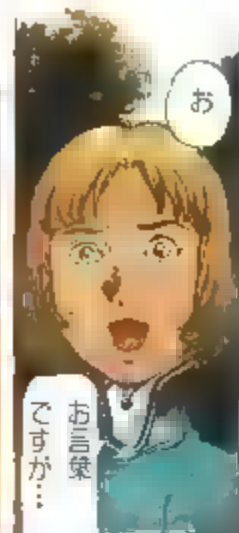
失礼を顧みずに言えばルイ殿はまだ若輩です
むこうみずなだけで用兵を御存知ない
五千や六千の兵ではこのアンジェの城壁にも触れられぬでしょう
そうかそうか
ならばよい

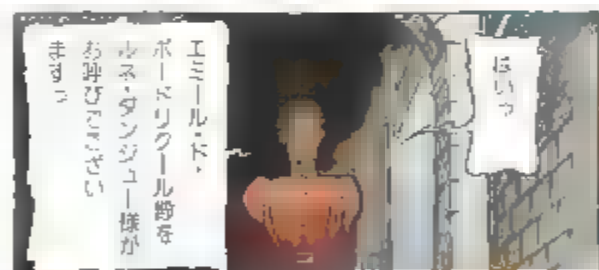
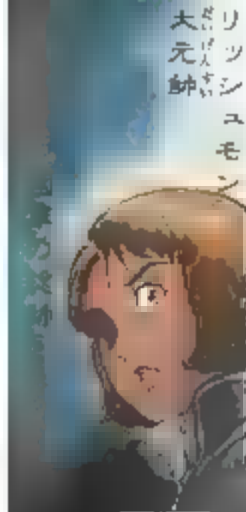
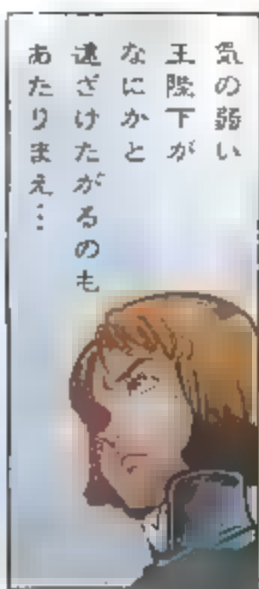
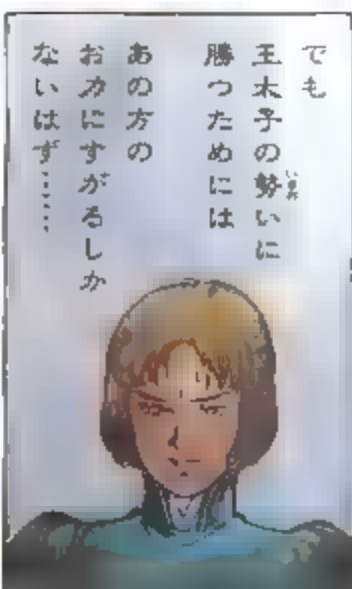
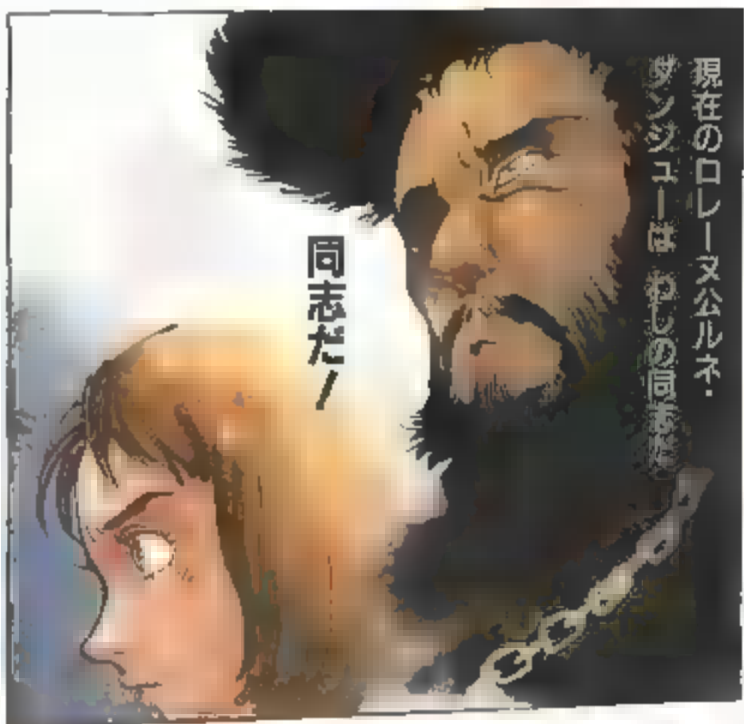
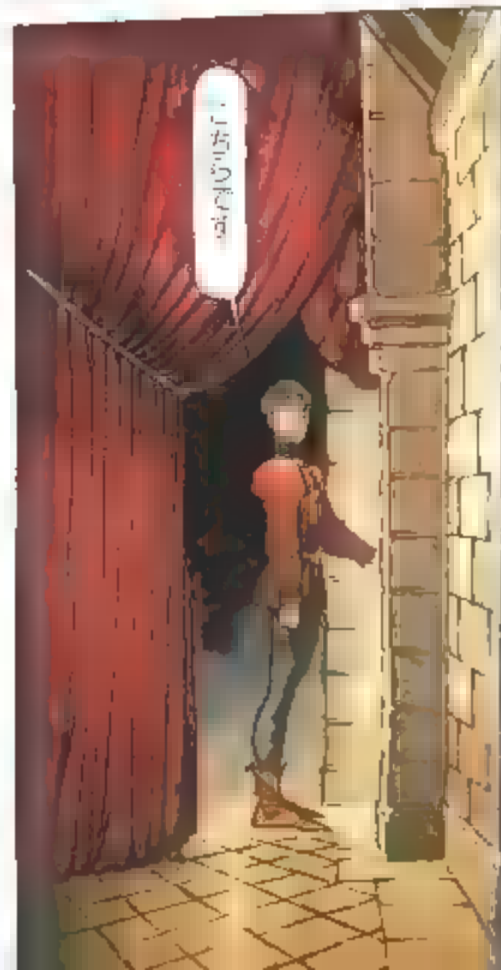
なんだかんだといってもあれは実の子だ
出来ることならそう手荒らには痛めつけとうない
間違っていたとあれが自分の思いあがりに気づいてくれればそれでいいのだ
悪いのはブルボンやアランソン等
あれの取り巻きどもだからな…

まて!!
ボードリクールの子だそうだな

ボードリクールはの重大なことを知ったうえで
おまえのような若輩をよこしたのか

ちがいます!
養父は参陣するつもりでした
私が申し出て養父と代ったのです!
ヴォークールールの領地はとても小さく孤立していて養父が国を空けたのでは領民を護ってやることが出来ないからです!

ボードリクールは識らぬ男ではない
しかし
今度のことでは同じようによく識り合った者のなかにも
当座の様子見を決め込んでいる輩がいる

武人には
領主の留守は攻めぬという決めごとがある
お
お言葉ですが…
オルレアンは
御領主のシャルル・ドルレアン公が捕虜になっていたにもかかわらず
包囲されました

……

なんだ?!

はいっ
エミール・ド・ボードリクール卿をルネ・ダンジュー様がお呼びでございますっ
いけ!
話はもうよい
ここの主がお目どおりを許すそうだ

リッシュモン大元帥
噂以上に
冷たくて
容赦のない方……
たしかに正しい考えや
力をお持ちのようだけど
あれでは
気の弱い
王陛下が
なにかと
遠ざけたがるのも
あたりまえ…
でも
王太子の勢いに
勝つためには
あの方の
お力にすがるしか
ないはず……
現在のロレーヌ公ルネ・ダンジューは わしの同志だ
同志だ！
なにを
沈んでいるの！
これからやっと
ルネ・ダンジュー様に
お会いできるというのに！
——そうだ!!
誰よりも心強い
お味方こそ
ルネ様の
はず！
マリー王妃の
兄様で御母様の
ヨランド・ダラゴン様共々
「少女」の強い御味方だった
大貴族アンジュー家の当主
ルネ様！
ルネ様こそ
王陛下の支え!!
いったい
どんな方
だろう!?
こちらです

入りなさい

……

やあ

よく来た
そっちへ
かけなさい

知っている――!!
わたしは
この人を……

ナンシーのお城で
ジャンヌが父のロレース公に
謁見した時
この人はたしか――
ジャンヌの
むこう側にいた……

わたしは見ている
その時そこに
いた―
―不思議な
大人達の一人として

ひさしぶりだな
エミリー

エミリー
……?
ああ
やっぱり……

トゥールからの
王陛下の脱出を
援けてくれた
そうだな
よいことを
してくれた

それだけでも充分
遠い所から来てくれた甲斐がある
先日ちょうど
おまえのことでわしに手紙が来た
手紙？

ボードリクールからだ
おまえのことをたいそう気遣っている

そしてこれを機会におまえとの養子の縁を解き
本来のロレーヌ公の家系に入れたいと言ってきている
と いうことはつまり
わしの義妹になれということだ
もちろん庶子としてだが
そんなことは
できません!!

ほう イヤか
それほどに
そ…
そうではありません
ただ…

もっとお役に立ちたいのです!
男として
ボードリクールの子として!

役に立つといってものォ
現在は「少女」の頃とちがう
たしかに王陛下の立場は強いが…
奇蹟で逆転するというわけにはいかぬ
もっとも
おまえにはその奇蹟も呼べまいが…

政治は汚い そしてムズかしい…
おまえのような純な若者は拘らぬがいい
わしも永く策士とか黒幕とか言われてきたが

正直 もう飽きたのだ
のんびりと好きな本でも読んで過ごしたい…

申しあげたいことが
ございます!!

さきほど王陛下とご一緒にお庭での兵達の訓練の様子を拝見しました／
ルネ様はあれをどうお思いでしょう？

戦のことはわからん
だから口出しもせん／
リッシュモンにまかせておけばいいことだ／

もちろん私も異をとなえたりはいたしませんでも
あまりに兵の数が少なすぎます／
もとより案じられておるところだ
だがそれも政治だ
身なりも武器も粗末です／あれではいくら一
大元帥が優れた戦略をおもちでもイギリスにも王太子の軍にも勝てません／

要するにカネが無いのだ
それに尽きる
兵を増やすには多額の給料が要るが前の侍従長のラ・トレムイユが散々浪費したため国の金庫は空同然になっておる
そんなはずはありません!!

?!
民は貧しくても貴族の方々はたくさんのお金をお持ちです／
王陛下のお味方のなかにも
ぜいたくな暮らしをしておられる方がいらっしゃいます／
ジル・ド・レーか……
ふん／
レー元帥!!
そうだ／ジル・ド・レー男爵!!

ジル・ド・レー様は王陛下の戴冠式で聖油をおとりになった方です！
それに「少女」の同志です!!
しかもフランス一のお金持ちではありませんか！
ヤツは駄目だ！
？
なぜ？
すでに何度も献金せよと言った
が！
ビタ一文も出さん!!
おまえたち若い者にとってみればジル・ド・レーは
いまだにオルレアンの英雄で「少女」の勇敢な戦友ということになるだろう！
だが現在はちがう！
大違いだ！
ヤツはただの浪費家でいぎたない大食漢だ!!
ホネの髄から
腐りきっておる!!

そんなことは……
疑うもよかろう
だが本当だ
「少女」と共に戦った者達は皆あの頃とはずいぶん変わってしまったが
ジル・ド・レーほどの変わりようはない
ひどいものだ……
私が行ってお願いしてみます！
行かせてください！
お願いですルネ様！
私を王陛下のために働かせてください！
役立たせてください!!
どんなにお変わりになっておられても「少女」のことはお忘れではないはずです！想い出してくださいます！そして王陛下の軍隊のために
お金を出してくださいます!!

……よかろう
それほど望むのなら……
行っても無駄だとは思うが……

ただしおまえを国王の正使にはできぬ
別な使いの者の随員ということになるが
それでよいな

はいっ
もちろん！

ベルトラン ピエール
おまえたちには本当に世話になったね

王様のために立派にお働きだと
帰ったらボードリクール様にお伝えしますよ
ホントに…ご立派ですよ
エミール様
ありがとう
ピエール

それじゃあ／

……

プレラーティ!!!

ダッ
ダッ
ダッ
プレラーティー！

プ
プレラーティー

はあ
はあ

なんです？

あ、あれを
持って来た！
新しい
ものでしょうね？

ああ
今やった
ばかりだ
けっこう
では
ここへ

すこし
色が黒い…
血もたんと採った!

羊飼いの子供だからな
でも顔立ちはいいぞ!
ふむ

これでいいだろう!

これでサタンは来てくれるか?!

たのむ! きっと呼び出してくれ!!
わたしはここで待っているから!

さあ わかりません
いつものことながらやってみなければ

なんだ?

ジル様
御門にお使いが…

今は忙しい!
追い返せ!

そうは参りません
王陛下の御使者ですよ

!

最初はなんといっても
これです
ヤツメウナギの
レモン汁漬け
どうです
イケるでしょう

つぎは孔雀です
こんがりローストにして
羽根飾りをつける
これはわたしの
アイデアでね

この猪のパテも
悪くない
コエンドロの実を
香料に使って 中には
たっぷりオレンジジャムを
詰めてある
……
……
……

……
白鳥も
美味いもの
です
子兎と
雛鳩の
タルトも
いい！
……
……

おーーっ
お待ちかねの仔豚の丸焼きが来た!

いやはや
これはたいへんなごちそうだ

いまどきは王陛下の食卓にも
こんなにふんだんな食べ物はござらん
ははは

突然の御来訪だったのでこの程度の料理しかお出しできない
おすすめしたい珍味も美味もまだまだあるのだが

充分すぎるおもてなしでございますレー男爵
わたしたちはごちそうをいただきに来たのではありませんから…

ジャン!
副官殿にもっとワインを!

とても強いワイン……

いけない! 酔ってしまいそう
……
特製の「イポクラース」だ
名誉ある貴族の酒!
蜂蜜・シナモン・白ショウガ・丁子・ニクズク・ナツメグそれにジャコウも入れてたっぷり寝かせてある
若者の口にはちとキツイかな?

■ブルターニュ公―ブルターニュ公ジャン五世、リッシュモン元帥の実兄。

あああ
駄目だ…
なんて
だらしのない！
しっかり
しなければ
駄目なのに!!
エミール!!
エミール!!
エミール！
エミール
エミール

あ あ は

あ あ は

ロレーヌのボードリクールの養子だと……

あの……

ボードリクールの……

う――――

アタマが痛い
それに
キモチ悪い…

あんな

こんなことじゃ駄目〃
しっかりしないと〃

いったい
なにをしに
ここへ来たと
思っているの！
わたしは
王陛下のために
大事な務めを
果たさなければ
ならないんだ！

ジル・ド・レー男爵は
したたかな人！
とても
あの御使者の
手になんか
負えない！

わたしが
なんとか
しなくては…

の方は
きっとなにかの理由で
昔をお忘れになって
いるだけなんだから！
雄々しい
王国元帥で
「少女」の戦友だった
光り輝くような
昔の日々のことを！

思い出して
いただこう
そうしたら
また
お味方になって
くださる
あんな
馬鹿馬鹿しい
飲み食いの
暮らしの
空しさに
気づいて

へ…
へへへ

へへ…どうも…
どうもどうもへへへ
?

かわいそうに

あの子供も
喰われてしまうのじゃ

この城の連中は子供を喰らうでの

!?

おまえ様は見ない顔だ
客人だね?

若くてキレイなお顔じゃ
気をつけなされ
喰われてしまわんようにの

神様の御加護が
あるといいのォ…

本当か
それは！

ああ
あなたが来客を迎えに行ってすぐでしたよ

ど
どんな悪魔だ?!
バロンです
あなたが一番お会いになりたがっていた

くそっ！
いいところだったのに!!

バロンはなんと言っていた？
昨日の生贄は気にいっていたようだったか？

気にいればこそ現れてくれたのですよ
素直にお喜びなさい

ごらんなさい
これ

……
ただしもう羊飼いはダメです
サタンは変化を望みますから

サタンが食べていったのです
キレイなものでしょう

どんな
子供ならいいと?

なにも子供と限る必要はありません
……たとえば

ギ…

フランシェか?!

へえ
……

……

ポワトゥーがよこしました
ナントの物乞いだそうで…

これではダメです
あなたがお遊びになるのならいいが

好きなだけ食べさせてやれ!
それと
躰をキレイに洗って着換えさせろ!

王の御使いだからですか?
そんなことはどうにでもなります
塔から落ちて死んだことにすればいい
イポクラースを飲みすぎたということにしてもいい!
ジル様!
……駄目なものは
駄目だ
サタンにお会いになりたいというのはお偽りだったのですか?
どうなんです?!
もしそうならなぜ
わざわざミラノから降魔術師のわたしを呼んだりしたのですか?

抱かれたいのでしょう！
サタンの胸に!!

あなたは肉欲に溺れた
罪を犯して快楽を得る背徳の性を御せなかった
もう神の国に入れられる望みはない
知っているでしょう
神がその昔ソドムとゴモラの市人をどのように罰したか！

あなたがご自分で思ったとおりなんですよ
あなたを容れてくれるのはもうサタンだけです

……

お引き合わせしてさしあげますよ！
そしてとりなしてあげます！
だから——

あの者を…

ありがとう
おかげで気分がよくなったよ

ジル様——!!

よく汗を
ふいて
やって！
ひどく急いで
いったい
どこへ……

のです！
黒い血が
騒ぐ
のです

イエスよ！
なぜあなたは

でも、
人は皆穢れています！
あなたのように
浄く賢明である
ことはできない
あなたの気高い
十字架の死を以てさえ
です！

イエスよ
なぜあなたは

おかげで
どんどんと身を

あ
あの

すみません
わたくし…

お話がしたくて
つい

失せろ

えっ!?

消え失せろ!!
わしに近づくな!!

SERAPHIN

近づくと
わしはおまえに
なにをするか
わからないぞおっ!!

はう。

ふううう……

首や心臓を
お使いで？

要らん
いつもの所に埋めろ

ブレラーティは
使わないそうだ

これでは
駄目だと……
……

おーっ
その気になられた！
それはすばらしい！！

……

あれならわたしも好みだけど
きっとサタンにも気にいられるでしょう

いいですか
まずこの魔法円の中に立つんです
悪魔を呼び出すあいだ中ここから一歩でも出てはいけません
これは聖なる結界ですから
ここを出ると悪魔に引き裂かれてしまいます

そして祈りを捧げるのです
バロンよ 悪魔よ 悪の化身よ われは父なる神と その子とその聖霊にかけて
汝を呼び出す者なり
聖母マリアと全聖人にかけて汝がみずから現れ我等に語りかけ我等の願いを果たされんことを

はははは—
だいじょうぶですよ
今のはほんの口ならしです
大切なお供えがまだなんですからね

生き血がふんだんに必要です
それと秘薬が
そのふたつがあれば我々はサタンの司る血のイニシエーションに参加できるのです
ああ でもだからといってすぐに殺してはなりません
サタンは生贄の苦しみを何より好まれますから

そうだ
わたしも立ち会いましょう!
滅多にない上等な生贄を屠るいい機会ですものねえ

あああ……

レミール様

そうそう

御夕食のお時間だそうで

なに
躰の具合が悪いの？

はい
昨夜のお酒の酔いがまだ…
ですから……

フム
さように下戸とあればいたしかたないのォ
今宵のメインディッシュは白鳥の丸焼きであるそうだが

あああ！
なさけない！

ジル様に
口をきいてさえ
もらえそうに
ない……

ジャンヌ
どこかに
いるのなら
教えて

誰?

お夕食は？
とうにすみました

あなたがおみえにならないのでジル様は
心配しておられましたよ

外へ？

あの離れの塔で
お待ちになっています

雨…

すぐそこですから！

あ

あ…!

どうした?!
なにしくじったあぁっ!

ガッ!!

大の男が三人もかかって…
あんな若僧ひとり……

かせ!

館の出入口をふさげ!!
逃げこませるな!!

こうなったらやっかいなことにならぬよう
見つけ次第…

……

馬小屋の方へ逃げたようです!
よしっとり囲め!!

ふふふ…
いるな
隠れていても
馬の様子で
わかる……
さあて
どこ
かな？
飼葉桶の中も
見ろ！
念の
ためだ！

あわてず ゆっくり捜せ！
どうせすぐ 見つかる

！

こっちだ
ふふふ こっちにいる

サタンの
お導き だ……

だれです?
シャンヌ…
いや…

熾天使だ
……

セラフィム!!

あああ

すまぬ…
ボードリクールの子……

ゆるせ
わしはどうかしていた…

おまえを
サタンに売り渡そうとした

一目見た時から気づいていたのに
おまえはジャンヌの化身だと

お手をおあげくださいジル様
わたしは
そんなたいそうな者ではありません

ただジャンヌと同じロレーヌから参った者でございます
ジャンヌと同じように
シャルル国王様をお援けしたくて

それでもいい
ウソでもかまわんからどうか今この時だけ
わしにジャンヌの夢を見させてくれ!

ジャンヌ…
傍へ寄って
おまえのかたわらで横になってもいいだろうか?
昔
戦場での野営の夜にしたように…

ジル様……

●クロード——当時何人もいた偽ジャンヌ・ダルクのうち、最も有名だった人物。一四三六〜三九年にかけてオルレアンやパリなどに出没した。

※クローヴィス――クローヴィス一世。フランク王国の初代の国王。四九六年に三千人の部下とともに、ランスの司教レミギウスの洗礼をうけ、ローマ・カトリックに改宗する。

なにも
言わないで
おいた

自分の手紙を抱いて
得意そうにしているジャンヌの表情が
あんまりよかったから……

ここは
馬舎だったのだな……
馬の尿のにおい
飼葉のにおい
干草のにおい…

わしは
赦されるだろうか……?

もちろんですジル様!

おまえはまだ知らぬ
わしはすでに数限りなく罪を犯した
わしは
黒い血を持って生まれた人間だ
生まれ変われるといいのだが……
ジャンヌの想い出だけを残して…
あとは赤子になって!

ふう～～む
あの性悪で自堕落なジルが
よく二十万エキュも出しおったな
ははは
そこはそれ——でございます
ところで
そちのその頭のキズはどうした?
これはですな 特製のワインを飲みすぎまして
酔ってベッドから転げ落ちましたとかで
オロカなハナシです
……
エミール・ド・ボードリクール!
ご苦労だった
良い働きだったぞ

※アゼンクールの～――一四一五年、フランス北部のアゼンクールで、仏軍はイギリス王ヘンリー五世率いる英軍に大敗する。